



© 2010 Sony Music Japan International Inc. Manufactured by Sony Music Japan International Inc. ® is a Trademark. All Rights Reserved. Original and duplicate.

SICC 10101 / STEREO



CHOPIN BALADES JEAN-MARC LUISADA

フレデリック・ショパン

Frederic Chopin (1810-1849)

- 1 **バラード 第1番 ト短調 作品23**
Ballade No. 1, Op. 23 in G Minor - G-moll - en sol mineur 10:45
 - 2 **バラード 第2番 ヘ長調 作品38**
Ballade No. 2, Op. 38 in F Major - F-dur - en fa majeur 8:38
 - 3 **バラード 第3番 変イ長調 作品47**
Ballade No. 3, Op. 47 in A-flat Major - A♭-dur - en la bémol majeur 8:18
 - 4 **バラード 第4番 ヘ短調 作品52**
Ballade No. 4, Op. 52 in F Minor - F-moll - en fa mineur 11:48
 - 5 **アンダンテ・スピアネートと華麗なる大ポロネーズ
変ホ長調 作品22**
Andante spianato and Grande Polonaise, Op. 22
in F-flat Major - F♭-dur - en mi bémol majeur 15:44
 - 6 **夜想曲 第13番 ハ短調 作品48-1**
Nocturne, Op. 48, No. 1 in C Minor - C-moll - en ut mineur 8:57
 - 7 **夜想曲 第2番 変ホ長調 作品9-2**
Nocturne, Op. 9, No. 2 in F-flat Major - F♭-dur - en mi bémol majeur 4:35
- Total Time 87:21

ジャン・マルク・ルイサダ(ピアノ)

Jean Marc Luisada piano

【録音】2010年7月26日～29日、岐阜サマソニックホール
Recording: July 26-29, 2010, Sannomachi Hall, Gifu **ESD Recording**

ルイサダ、ショパンの「バラード」を語る 川田翔也

「ショパンとマルセル・フルーヌト(1871-1922)は似ている。もしも知り合いだったらよく理解しあえたろう」とルイサダは言う¹⁾。二人ともノスタルジックだし、非常に子カタク、かつ燃え上がるようなロマン派的性向を持ち、精神的な研ぎ澄まされた深さも持っている。フルーヌトの書く文章は、延々句点がなく、非常に長い。音楽的で魔術的だ。それは彼が喘息だったからだ。ここに僕はショパンとの共通項を見出すんだ。ショパンも肺を病んでいて、同様に呼吸器に問題があった。そしてフルーヌト同様、ショパンのフルーヌトは、途絶えることなく、実に長い。たとえばバラードなら第4番の第2主題がそうだし、有名な例としては、ピアノ・ソナタ第3番の第1楽章第2主題、夜想曲作品55-2(第16番変ホ長調)なども挙げられるだろう。後にはローグナーなどが用いたけれど、こういった長いフレーズは、シューマンにもブラームスにもない。そして、ショパンの場合も、身体的、精神的問題からだと思うんだ。ショパンは何事かを言いたかったのだけれど、己の思うところを敢えて正確には言わず、自らのパーソナリティを隠す方向に行ったんだね。

フルーヌトのテクニストに対し、マルセルは喘息と神経症の病征を指摘できる箇所を洗い出し、ルイサダ同様の指摘を詳細に行った、晩年の吉田城の表現を借りるなら、ショパンの「自己弁明の試み」に、ルイサダはどうか対するの²⁾。この問いに対しては、「僕がそれぞれの曲に知して抱くグイション、すなわち印象、ないしは五感に関わる感覚的なものは、あくまでも個人的なものだ。だから、聴き手がいかなるグイションを抱こうと自由、と聴き手のグイションを担保して留保を加えつつ、いくつかの曲に関して、己のグイションを開陳してくれた。

「バラード第2番は、ショパンの個人的なグイションだと思えるね。冒頭の主題は子供時代の純粋さと無垢(innocence)に満ちている。そこになんらかの暴力的な事件が起き、子供時代を決定的に破壊して、トラウマの痕跡を残す。だから、その後、また冒頭のシリアスな主題が回帰しても、もはや無垢なものではありえず、痛ましい思いで繰り返される。過去の幸福は永遠に帰って来ないし、過去に戻れたらもしないからね。そして最後には、その事実を受け入れることを強いられる。だから聴き手や演奏者は、

自らを開き、それぞれ「笑われた時」を巡って想像を馳せなければならぬ。

シヨパンの「テラードは、ポーランドの詩人アダム・ミツキエヴィチ(1798-1855)の詩に想を得ている」とはよく言われることだが、ルイサダはそれがあてはまるのは「テラード第3番のみだ」と言う。この曲は、空気・火・土・水の四大元素のうち、水を司る水の精=オプティム(オプティム)にまつわるミツキエヴィチの詩が下敷きになっている。主人公の狩人が湖のほとりでおプティムと恋に落ちて愛を誓うが、彼女は消えてしまう。その後彼女を捜しあぐねた彼は、出会った別の女性の誘惑に負けてしまう。だが彼女は、別の姿に化身して彼を試したオプティムだったのだ。彼女の怒りに触れた狩人は、水の中へと引きずり込まれる。「だが」、とルイサダは言う。

「僕がこの曲で好きなのは最後だ。主人公はおプティムに溺れさせられるがまだ。シヨパンの天才は、ここを短調ではなく長調で書いたことだ。つまり、多分にサドマソミスタインックだったシヨパンの「テラード第3番」において、主人公は溺れて死にたいと自ら望むし、死んでこそ幸せなわけだ。いわば「死の中での勝利」でも言うべきものが、ここにある。

「テラード第4番」では、シヨパン自身が、一人

称で、笑われた時と彼自身を極めてノスタルジックに物語っているが、かといって何ら重ね合わせるべき具体的な筋立てのない、非物質的(immaterial)なものだ。「テラード第4番」の冒頭「ルーヌは、美のグレイジョンの出現のだけれど、恐らくその美の中にシヨパンが見たのは、近づくとその出来ぬ不可能な愛であって、シヨパンはその諦念に押しつぶされている。この第4番は特にそうだが、シヨパンの「テラード」はベトーヴェンの後期ソナタやブラームス晩年の間奏曲(作品117、作品118-1、2、4、6、作品119-1、2、3)に匹敵する傑作揃いだ。

対して、「アンダンテ・スピアネートと華麗なる大ボロネーズ」は、ポーランドから大志を抱いてやってきた、優雅な若きシヨパンそのものだ。シヨルジュ・サントと初めて出会った時、彼女が「このシヨパン氏という方は少女ですか?」と言ったのは有名なエピソードだが、それだけシヨパンは気取って、というところだ。この曲も、さらびやかで優美だ。だが、その側面だけが強調されると、この曲の持つ騎士道的側面が見落とされてしまう。この曲には、その2つの雰囲気が見え隠れしているんだ。華麗なる大円舞曲作品18にしてもそうだが、シヨパンの曲は、常に皮相的なものではなく、深さを備えている。

ルイサダが筆者に繰り返し注意を促したように、聴き手である我々には、こうした彼のグレイジョンを受け容れ、音楽に重ねて聴く必要はない。ただ、聴き手を拘束しない、開かれたこのアルバ全体についてのルイサダの言葉は、是非とも付言しておきたい。曰く「モーパッサンの3篇の短篇小説を映画化した、マックス・オヴルスの『快樂』(1952)³⁾で、最後に響く『幸せ』とは快いものではない」という台詞が、今回録音した全ての曲に言えることだろう。

オヴルスの三部作形式のこの映画の第三部は、『モザル』を映画化したものである。画家ジャンが、そのモザルであるジョゼフと電撃的な恋に落ち、激しく愛し合う。しかしやがて倦怠期が訪れ、喧嘩が絶えなくなり、ジャンは別れようとするが、ジョゼフは窓から身投げすると脅すのだ。その言葉を受けなかったジャンの前で、彼女は身投げする。そして場面が数年後、海辺でジャンがジョゼフの椅子を押し出している。彼は、治療しえぬ麻痺を負ったジョゼフと結婚したのである。モーパッサンの『アヴェ・ヴェルム・コルプス』(1868)に乗せ、ジャンの友人たる物語の語り手によって繰り返されるのが、ルイサダが別に出した、この映画の最後の台詞である。束の間の快樂と永続的な幸福を巡るこの三部作で、オ

ヴルスは快樂と幸福、そして死を同時に扱ってみせた。

シヨパンとブルームを結び、呼吸器の病と死に対する恐怖。シヨパンとサント、そしてオヴルスを結び、快樂と幸福と死。ルイサダは、いずれの曲の中にも、シヨパンという作曲家の多義性と、その相克のドラマを垣間見ることが出来る、そう言っているのである。ただし、シヨパンという作曲家を巡る考察は、もちろんこれだけではない。各曲のドラマへと通じる扉の鍵の持ち主は、他ならぬあなたである。

(2010年10月)

1) 「笑われた時を求めて」全13巻 ヴルセル・フィルム社、鈴木道彦訳、集英社

2) 「ブルームと身体」 「笑われた時を求めて」における病・性愛・飛翔 吉田城善、吉川一義編、白水社、2008年

3) Le plaisir, par Max Ophüls, DVD, Criterion Collection, 2008

曲目解説

バラード第1番 短調 作品23

1831年にウイーンでスケッチされ、1835年のVUで完成された。

序奏では両手ユニゾンが重々しく3オクターヴを上行、最後に変ホ音が不協和音を鳴らす。6/4拍子で提示される第1主題には4つの音符の連なりによるエピソードが続き、その後アルペッジョで広い音域を駆け巡り、左手が4度と空虛5度を重ねたあと、意表を断く変ホ長調のソルト・フォーチェで第2主題が出る。しかしこの幸福な囁きは、イ短調の第1主題が回帰する展開部で破られる。左手が鳴らすホ音のドミナントペダルが不吉な影を招来し、第2主題が力強い和音を伴って帰ってくる。スケルツォ的なソルーズがまた予想外な効果を生み、再現部では第2主題が不協和音を伴い、ト短調で第1主題が現れるまで解決されない。不吉な二音による新たなドミナントペダルを経て、突如最後のエピソードを炸裂させ、熱狂的な2/2拍子のコーダで閉じられる。

バラード第2番 へ長調 作品38

初版は1836年に、改訂版が1839年にマヨルカ島で完成され、「クライスルリアーナ」を献呈してくれたシューマンに献呈された。

アンダンテの主題は6/8拍子のソルリアーナのリズムを刻み、ノスタルジックな囁きが繊細な和声付けをなされて織られ、最後はトニックのアルペッジョからメテイアントが6度繰り返される。そこに突然、激越なソルリアント・フォーチェの旋風が巻き起こる。急速な和音連打によって音量もがままで上がり喘ぐように

ダイミニョエント、音階を弾いたあとアンダンテの主題が戻ってくるが、この主題は6小節で一端その歩みを止め、また主題提示の時の厚みを増した和声付けがされている。半音階を経てアツチエラント、また二短調でソルト・フォーチェが回帰、暗いソルロとトリルがイ短調のソルリアーナを引き寄せる。その大面が増6度の和音で突然止むと、へ長調でアンダンテの主題が戻ってコーダとなるが、この和音的な静謐さも、実は深淵と隣り合わせだったことを強く印象づける。

バラード第3番 変イ長調 作品47

1840年から1841年にかけて書かれた。

序奏なく第1主題がいきなり提示される。また第2小節目の2度下行を含む和音2つのモチーフが曲全体を覆う。続くエピソードは高・低音域の変イ音両手オクターヴによって印象づけられ徐々に高揚、八短調の両手アルペッジョによる

ソルーズから変イ長調で第1主題が回帰、トニックの和音で閉じられる。舞踏的なへ長調による第2主題は、八音のフロウ・オクターヴを4回繰り返して始まる。音量は*ff*に至り、両手オクターヴから再現となる。その後のエピソードは、16分音符によるアラバスクが紡がれ、変イ長調に戻ると今度は変イ音が4回鳴り、変イ長調で第2主題が再現、エンハーモニック転調によって豊八短調に転じて無機感を纏る16分音符の伴奏が付けられる。やがて左手ソルロの上で、右手が口長調で旋律を受け継ぐ。このソルロの中で、突然断片的に第1主題が再現、第2主題と2度と和音モチーフと交錯した音楽を紡いでコーダへ、壮麗な和音で閉じられる。

バラード第4番 短調 作品52

1842年に書かれたこの曲は、スケルツォ第4番、幻想ポロネーズなどと並び晩年の様式が色濃く、以前のものとはかなり異なる様相を呈している。

右手のト音のオクターヴ反復からはじまる7小節の序奏に続いて第1主題が現れ、変ホ短調からへ短調へと移る。カデンツァを経て再び主題が帰ってくる。反復音などによって主題が変容され、右手は16分音符、左手は豪壮なオクターヴと化し、*ff*の頂点を築いたあと装飾的終

過句を経て、対照的に穏やかな第2主題が変ロ長調で提示される。だがすぐにソルロ・エピソードや躍進いがちなリズムで高揚し、序奏モチーフがへ長調で回帰、カデンツァで閉じられる。その後第1主題が再現、まずカソニックに扱われてから原型で再現、更に右手6〜10音符の連続から3音符のバツセーに変容された昂揚のバクトルが半音階下行によって屈々と第2主題が変ロ長調で再現するが、左手に音階と複雑なアルペッジョを伴ってまるで異なる表情を見せながら一気に昂揚、*ff*によるカデンツァが轟音を立てる。その嵐を8小節運せ止めたあと、猛然と疾駆するコーダに突入、全曲が結ばれる。

アンダンテ・スピアネートと

華麗なる大ポロネーズ 変ホ長調 作品22

そもそもは管弦楽付き楽曲であるこの曲だが、ポロネーズは1830年から翌年にかけて、音楽では先行するアンダンテ・スピアネートは1834年に作曲され、後者をショパンはVUで演奏している。1836年に現在の形で出版され、リスト男爵夫人に献呈。ト長調、6/8拍子の優美なアンダンテ・スピアネートの間には、3/4拍子でへ長調の、トリオ的なワルチタライーズが挟まっている。ポロネーズは、ト音によるアンダンテの序奏に続き、変ホ長調で、右手に裝飾音を満

載した、ピアノとマイクがつり又ミックスな第1主題が提示される。第2主題は短調の物憂いものだが、やがて高揚して再び第1主題が現れ、長いコーダで締め括られる。

夜想曲 第13番 八短調 作品48-1

レント 4/4拍子。「2つの夜想曲」作品48は、1841年11月に作曲された。第1曲は形式的には三部形式だが、モーツァルトの指示がある冒頭部は誘送行進曲のように響き、主題の和声付けも極めて精緻だ。中間部はポロ・ペグ・レントで長調となり、両手低音の和音とアルペジオが連続して静かなコラール風にはじまるが、やがてクワッセンブ、左手に3連符で半音階上行するオクターヴが端り響き、凱歌の如きものとなる。

この3連符の16分音符が8分音符に引き継がれて、ポピオ・モビメントの主題再現に入るが、両手のリズムが重なりあふ。属七和音のフォルテ・シモからリチタートし、チボリ6度を右手が上昇して折り返すから、静かに閉じられる。

夜想曲 第2番 変ホ長調 作品9-2

アンダンテ 12/8拍子。「3つの夜想曲」作品9は、1830年から翌年にかけて書かれ、マシュー・ソル・ソルに献呈された。この第2曲は調性も拍子も同じフォルドのノクターン第1番や第10番とかなり近い。旋律の親しみやすさ、シンパルな構造に加えて演奏の容易さも手伝い、全ノクターン中最も有名な曲の一つである。

川田明也

Produced by Philip Taung <http://www.philiptraung.com/>
Balance Engineer & Editing: Tak Sakurai (Pau, Ltd.)
Recording Engineer: Kazuo Sugimoto (Victor Creative Media, Co.)
Piano Tuner: Toshiro Suzuki (YAMAHA Artist Services Tokyo)
A&R: Ryusuke Kozawa (Sony Music Japan International, Inc.)

Sales promotion: Tomohiko Yoshida (Sony Music Distributions, Inc.)
Special thanks to:
YAMAHA Artists Services Tokyo
Yoshiyuki Inoue (Tokyo International Music Corporation Ltd.)
Salamanca Hall, Gifu
Olivier Cochet (Sony Music France)
Masahiko Arai (Sony Music Foundation)

ショパン・ピアノ・ソナタ(ピアノ)

ロマン派のバートーリーとショパン、ドビュッシー、ラヴェルなどの近代フランス音楽における優れた解釈者としての名声を確立しているショパン・ピアノ・ソナタは、1838年チユニシアの生まれ。6歳でピアノを始め、ラヴェル・ショパンとドビュッシー・ラヴェルについて学び、その後、イギリスのユニオン・ユニオン音楽学校でも学ぶ。16歳でパリ国立高等音楽院に入学。ピアノをドミニク・メルクに、室内楽をジュヌヴェーヴ・ジョロチエに師事し、その両方の課程でアルミエ・フリを修得。また、ニキタ・マカロフとパウル・パトクワースと、ミロツシユ・マギンらのもとでも定期的に学ぶ。

1983年、ミラノ・スカラ座で開催されたチャイコフスキー国際ピアノ・コンクールで第2位入賞。1985年、ワルシャワでのショパン国際ピアノ・コンクールで第5位に入賞し、あわせて国際批評家賞を獲得。このショパン・コンクールでの成功が彼を国際的キャリアに導きつづけた。以来世界各地においてソロ、室内楽、協奏曲のジャンルで幅広い演奏活動を展開している。

録音も数多い。ハーモニック・レコーズに録音した2枚のソロ・アルバム(ユニヴァーサル・レコーズ)を皮切りに、ドイツ・グラモフォンは、ショパンのワルツ集、マズルカ全曲、クララとスクリエカズ、シューマンの「楽のバレー」、シューマンとシューマンのピアノ協奏曲などを録音。

1997年よりRCA Red Sealの専属となり、モーツァルトのピアノ協奏曲第9番と第27番、ハイプンのピアノ協奏曲とソナタ、シューマンの獨逸祭ほかのピアノ作品集、ショパンのピアノ作品集、フォーレとドビュッ

のピアノ作品集、ショパンのピアノ協奏曲第1番(国内楽版)とドラルグーのピアノ五重奏曲、ローラン・コルシヤのワルツ、フォーレほかのヴァイオリン作品集、ショパン、リスト、スクリエカのピアノの3曲の短調ソナタを1枚にしたアルバム、ベートヴェン作品集などが発売されている。2007年からは日本でも録音を開始し、舟歌や独唱ボクレーズを収めたショパン名演奏とマズルカ集が発売されており、この「ピアノ全曲」はショパンの第3弾となる。

ショパンは8千以上のピアノを個人コレクションとして持つほどの大の映画好きで、ショパン・モローと共演した「象のバレー」、マシュー・メルとの共演になる、ショルジュ・サントの手紙の朗読とピアノ演奏を交えた舞台「聖なる炎-ショルジュ・サントとショパン」(邦題「ショパンとサンデー愛と哀しみの旋律」)日本公演:2000年(11月)など、女優とのコラボレーションによる音楽と舞台を融合させたプロシエクも手がけている。また、トム・クルーがその才能を評価し製作を買って出たスペイン映画界の傑作、アハバ(ドクメンター)の映画「アハバ」(2001年)では無人の部屋のピアノがショパンのワルツ作品69-1を演奏する印象的なシーンがあったが、そこで使用された音源は他でもないショパンのものであった。

1989年6月に「芸術文化勲章シュヴァリエ」を、1999年11月には「国家功労5等勲章」をフランス政府より授与される。2003年7月14日には、「芸術文化勲章オフィシエ」を授与された。

ハバ在住。黒のワグネル・グラーブナー・ボグナー(トチガタ)と暮らしている。
<http://www.jeanmarcusdata.com>

